

# 「初期」フリードリヒ・シュレーゲルの歴史意識

## —— 近代文学と古代文学 ——

岡 崎 勝 世

### 目

- (一) はじめに
- (二) 近代文学と古代文学
- (三) 近代文学の本質

### 次

- (四) 古代文学の本質
- (五) 美的革命
- (六) 歴史意識

### (一) はじめに

本稿の目的は、ドイツ初期ロマン主義者の一人であり、特にその批評活動・理論的活動の側面でのこの派を代表したフリードリヒ・シュレーゲル(1772-1829)について、彼がその活動の最初の時期(1794-'95)<sup>①</sup>においていかなる問題意識のもとにその思想的歩みを開始したかを探り、あわせてその意味について考察を加えることである。

周知のように、初期ロマン主義者達はいずれもその活動の最初期において古代文学に深く傾頭したという共通の特徴を持っているが、この点でもフリードリヒ・シュレーゲルは典型的な歩みを示している。ヘルダーが「ヴィンケルマンが遠方から美術に関してギリシア人の秘密を説き明かしてくれたように我々にギリシアの知恵と詩の神殿を開いてくれる一人のドイツ人のヴィンケルマンは……どこにいるのであろうか。美術に関するヴィンケルマンはただローマでのみ開花することができた。しかし詩人に関するヴィンケルマンはドイツにも出現しうる」<sup>②</sup>と述べてドイツに対して「詩人に関するヴィンケルマン」の出現を呼びかけたのは1767年のことであったが、フリードリヒは兄のヴィルヘルムとともにこのヘルダーの呼びかけに応ずべくその大学生活(1790-'93)時代以後研究を重ねてきていた<sup>③</sup>。彼は『ギリシア文学の諸流派について』<sup>④</sup>という論文をもって1794年以降公的

活動に入るが、翌年の95年に至るまでのその最初期の間に発表された論文はほとんどが古代学に関するものであった。この期間は、従って、後年ロマン主義者として花々しい論陣を張った彼が、むしろそれとは敵対的な立場に立っていた時代であったともいえよう。

そこで、本稿では、彼のこの「ギリシア狂」<sup>⑤</sup>の時代における問題意識は何であったのかを、特にその歴史意識を中心に、探ることにしたい。その際研究の主対象とするのは『ギリシア文学の研究について』<sup>⑥</sup>という論文である。この論文は1795年に書き上げられ、1797年に発表されたものであるが、これを主対象として選ぶ理由は、この期の多くの論文<sup>⑦</sup>が特殊な専門的論文であるのに対し、この論文が最も包括的内容を持ち、またこの期の彼の問題意識を最もよくうかがわせてくれるものだからである<sup>⑧</sup>。

### (二) 近代文学(die moderne Poesie)と古代文学(die antike Poesie)

フリードリヒ・シュレーゲルのこの期の問題意識の中で最も根本的なものは近代的なものとの古代的なものとの対立、及びそれらの総合ということであった。その事をまず我々は確認しておかなければならないであろう。彼はかつて兄のヴィルヘルムに次のように書いていた。「我々の文学の問題は、本質的に近代的なもの(das Wesentlich-Moderne)と本質的に古代的なもの

の(das Wesentlich—Antike)との総合ということであると思われる。全く新しい芸術の時代の最初の人であるゲーテがこの目的に至る出発点となったと付け加えるならば、君は多分私の言う事を理解してくれるだろう。君がダンテや、また多分シェイクスピアの精神を研究する……ならば私が前に本質的に近代的なものと名づけたものや、私がとりわけこれら二人に見出したものを容易に知るようになるだろう。」<sup>⑨</sup>(1794年2月27日付)

私が研究の主対象として選んだ「ギリシア文学研究について」という論文は、実は上の手紙で語られていた問題をより詳細に展開したものに他ならない。ここではギリシア文学研究の今日的意義を語るという形をとりつつ、近代の本質と古代の本質の対立・総合ということについての彼の見解が提示されているのである。従ってここでは単なる文学上の問題が検討されるのではなくて、近代と古代という二つの時代が検討されることになる。即ち歴史そのものが検討されることになるのである。

### (三) 近代文学の本質

古代と対比されるものとしての近代または古代文学に対比されるものとしての近代文学を考察する場合、まず出発点として要請されるのは近代そのものが、近代文学そのものが全体として一定の性格的特質を持つ事である。ところがこの近代文学<sup>⑩</sup>が示す最大の外見上の特質はその多種多様性、異種のものとの混合ということである<sup>⑪</sup>。そこではイタリア、フランス、イギリス等々国民性の相違によって様々な文学があり、またその国民的性格も絶えず変化している。そこでは一定の性格、共通の法則といったものは何もないように見える。「近代文学の唯一の性格は性格喪失性であり、全体の共通性は紛糾ということにあり、その歴史の精神は法則喪失性をもち、その理論の結果は懷疑主義であるよう

に思われる」(S.91)のである。

そこでまず彼は近代文学のこの外見上の多様性・折衷性・性格喪失性・等々の中に潜む共通の特質の探究をもってその議論を開始する。探究結果として示される近代文学の共通の性格の第一点はその歴史的基盤の共通性である。即ち「ヨーロッパ諸国民体系」(S.93)という歴史的基盤に於ける共通性である。この体系は言語・制度・慣習等々に於いて一つの共通する精神に基づいており、またキリスト教という同一の宗教を有している。それは歴史的には中世初期の「国民的な差違性が全体の同質性の中にほとんど埋没していた」(S.94)状態から出発した。「その時代の性格はより単純・より画一的であった。しかしながら一つの全体的革命を通じてヨーロッパ世界の形態は一変してしまった。そして第三身分の勃興とともに様々な国民的性格がより多様性を拡大し、またより大きく分裂することにもなった。しかしなおそれにも拘わらず非常に多くの類似性が残存しているのである。」(S.94)

このような歴史的基盤の共通性の上に立つヨーロッパ近代文学は、従って内的原理に於いても「非常に多くの類似性」を持つことになる。これらの内的原理上の共通点として彼が目指するのは、まず、ヨーロッパ諸国民全てが「古代芸術の模倣」(S.94)に絶えず立ち帰り、そしてそこから新たな文学的活動の道を導き出しているということ、また一般公衆のみでなく芸術家自身までが自己の要求の解明や芸術の法則、目的、構造、発展方向等々の解明に関してそれを芸術そのものに求めるのではなくて科学に求めるという、「理論と実践の関係」(S.94)の独得なあり方、「下級芸術と上級芸術の鋭い対立」(S.94f)、「さらに近代文学全体、とりわけ後期におけるその性格的なもの、個性的なもの、興味的なもの完全な優越(das totale Uebergewicht des Charakteristischen, Indi-

viduellen, und Interessanten)」（S. 95）  
「最後に新しいもの、刺激的なもの、奇抜なものへの<sup>12</sup> 不斷の飽くことなき努力、しかもなお憧憬は満たされぬままである」（S. 95）こと、以上である。

以上のように彼は一つの統一体としてのヨーロッパ近代文学が持つ内的原理の諸特徴をとらえた訳であるが、これらの一見相互に無関係に見える諸特質についてそれらを統一的に把える努力が次になされることになる。

そのために彼が行った事は二種類の教養の概念的な区別ということであった。彼によれば、人間の教養には自然的(natürlich)な教養と人為的(künstlich)なその二種の区別がなり立つという<sup>12</sup>。前者は自然を、後者は自由を教養の方向や発展法則、目標を定める第一の規定的動因として持っており、「前者に於いては行為の本源的動因は不定の欲望であり、後者においてはそれは一定の目的である。前者では悟性(Verstand)は……高々助手…にすぎず、総体として統合された本能(Trieb)が教養の絶対的立法者でありかつ指導者である。後者では動因となりまた影響力を持つのはなお本能であるとはいえ、それに反して、教導的立法的権力は悟性、即ち盲目の力を教導しその方向を決定しその意志によって個別的部分を分離・結合するところの一つの最高の指導的原理なのである。」(S. 97)

ところで自然的教養はその本性上必然的に限界を持ち、やがて自己崩壊をとげるであろう。というのは「本能というものはなるほど強力な動因ではあるが、しかし盲目の指導者なのであるから。」(S. 97)「これに対して人為的教養は少なくとも適正な立法・持続的改善・究極的で完全な満足へと導くことができる。というのは全体の目的を規定している同一の力がここではまた同時に発展方向を決定し個別的諸部分

の教導と秩序化を行っているからである。」(S. 97f) このようにして「自然の次にのみ人工(Kunst)が続くように、自然的教養のあとにのみ人為的教養が続くのである。」(S. 97)

以上のように彼は二種の教養を質的・段階的に区別したのであるが、この区別はそもそも近代文学の、従って古代文学の特質の解明のためになされたものなのであって決して超歴史的概念にとどまるものではない。彼のこのような態度、即ち具体的・現実的歴史過程と密接に関係させつつ自己の概念及び論理を組織立てていくとする態度は本論文全体に通ずる特色の一つとなっておりそこに筆者自身注目しているのであるが、今やこれら二種の教養が各々古代文学と近代文学に対応させられていくのである。近代文学に対応するのは、言うまでもなく、人為的教養である。「ヨーロッパの教養の最初期からすでに近代文学の持つ人為的根源の明確な足跡が見出される。力や素材はなるほど自然により与えられてはいるが、美的教養の教導原理は本能ではなくて一定の教導的概念だったのである。」(S. 98)ここで言われている「教導的概念」とはもとより悟性の教導ということの別の表現にすぎない<sup>13</sup>。そして「このような悟性の支配から、このような人為性からこそ我々の美的教養は全て解明されるし、また近代文学の最も特異な特質も完全に解明されるのである。」(S. 101、傍点筆者)

このようにして近代文学の根本的特質をその人為性、またそれに対する悟性(一概念)の支配に求めた彼は、これを基礎としてさらに近代文学の特質の全体的解明にむかうことになる。近代文学の上の特質を表現する言葉として彼はこれを「叙述的芸術」(die darstellende Kunst)と呼び古代の「美的芸術」(die schöne Kunst)に対置しているが(S. 103)その理由は後者が美を目的としているのに対し前者の目的

は決して美そのものではないからである。近代文学が悟性によって教導されるがゆえに、それが追求するものは「哲学的に興味的なもの」(S.105)たらざるを得ないからである。即ちここから近代文学における《興味的なもの》の支配という特質が発生してくることになる。そしてそれは一つの単独の概念と意図によって規定されるものであるがゆえに《個人的なもの》、《性格的なもの》、《哲学的なもの》の支配という特質としても捉えることができる<sup>14)</sup>。

この《興味的なもの》の追求は彼の時代においては《新しいもの》、《刺激的なもの》、《寄拔なもの》を求め断続の努力という、いわば腐敗した現状を産み出すことにもなった。しかし近代文学は同時に《哲学的なもの》の支配をうけるものであり、この意味に於いて「理念性」の追求をその性格的特質として本来的に具有している<sup>15)</sup>。彼は近代文学のこの側面を代表する文学を特に「教訓的文学」(S. 105)と名付け、この教訓的文学こそ「近代文学の誇りであり榮譽であって、それは近代文学の最も独創的産物」(Ebenda)とこれを高く評価する。この教訓的文学はその内的発展の結果としての「哲学的悲劇」(die philosophische Tragödie S.106)<sup>16)</sup>に於いてその完成をみるのであるが、それは古代文学の完成段階として現われる「美的悲劇」(die schöne Tragödie, Ebenda)と対立する。というのは「後者が美的文学の完成であり純粋な抒情的諸要素から成り立ち、その最終的結果が至高の調和であるのに対して、前者は教訓的文学の完成であり純粋な性格的諸要素から成り立ち、またその最終的結果が至高の不調和だからである。」(Ebenda)

この近代文学に最も独自の《哲学的悲劇》の典型として彼が提出するのは『ハムレット』である。彼によればハムレットの性格の叙述ほど哲学的悲劇の対象である不調和の完全な叙述はない。ハムレットの「全ての勝れた力は悟性

に圧縮され、行動力は全く皆無とされている。」(S. 107)この結果「思考力と行動力の無限の不調和」(Ebenda)がこの作品に於いて典型的に叙述されることになるのである。こうしたハムレット像は、それはそれで実は彼自身の個人的資質への自己反省とも結合しているのではあるが<sup>17)</sup>、しかしそれは同時に以上のような近代文学の基本的性格の論理的帰結としても彼には思われたのである。そしてこのような彼の『ハムレット』評価はシェイクスピアに対する極めて高い評価に当然結合していくことになる。「人は彼を誇張ではなしに、近代文学の頂点であるということが出来る。」(S.108)<sup>18)</sup>その理由は、彼の劇のいづれも決してギリシアのそれのように「美しくはないし、また全体の秩序を美が決定している訳でもない」(Ebenda)からであり、さらに、客観的な純粋な真実に我々を導く訳でもなくて「彼が我々に与えるのは、たとえそれが最も豊かでありまた抱括的であるとはいえ、ただその純粋な真実についての一面的見解のみ」であり、かつ「彼の叙述は決して客観的ではなくて、むしろ徹頭徹尾技巧的(manierirt)である」(S.109)からである<sup>19)</sup>。

さて、近代文学を上のように《哲学的に興味的なもの》を追求するものとして捉えその文学の頂点を《哲学的悲劇》、シェイクスピアにシュレーゲルは見たわけであるが、この認識は同時にまた彼に近代文学の限界をも認識させることになった。というのは、《興味的なもの》の支配は近代文学の憧憬を決して満足せしめ得ないものなのである。《興味的なもの》には決して限度というものが無いのであって、しかも「人間性に基づく完全なる充足への要求が、芸術が今日までもっぱらそれらの叙述にむかっていたところの個別的なもの、変化するものによって欺かれることが多ければ多かっただけ、それだけますますその要求は苛烈で不断のものとなる

のである。」(S.110)このような近代文学の根本的性格からくる矛盾を、しかもそれはそれ自身の力では決して解決し得ない。なぜなら、それが自己の性格に忠実である限り絶えずより「興味的なもの」、より「個性的なもの」等々の追求によって「完全なる充足」を実現しようと努力する以外にないのであって、しかもその結果はより「苛烈で不断」の要求を産み出すだけなのであるから。彼の認識によれば、このような近代文学の限界性が最も露わになったのが彼の時代であり、その腐敗の現象が最大限に達して「美的無政府状態」(S. 92)が当時現出していたのである。

しかし「無政府状態は有益な革命の母となったものである。」(Ebenda)従ってまた彼の「時代の美的無政府状態が同じような幸運なる破局を期待できぬものであろうか？」(Ebenda)彼は勿論この「幸運なる破局」の到来を予言する。というのは近代文学はやがてその不断の努力の中で「普遍的なもの、不変のもの、そして必然的なもののみが——即ち客観的なもののみがこの大きな裂け目を埋めることができ、美のみがこの熱い憧憬を鎮めることができる」(S.110)ことを認識するに至るからである。「個性的なものの過剰は、かくして自ら客観的なものにむかうものであり、興味的なものは美の露払いなのであって近代文学の最終的な目的は他ならぬ至高の美即ち至高の美的完全性となるのである」(Ebenda)「興味的なものの支配は趣味の全く一時的な危機に他ならないのであって……その支配は結局は自己自身を消滅させる」(Ebenda)ものなのである。

このように近代文学はやがて自己の限界を「客観的なもの」、《美》にその目的を転換することによってはじめて乗り越えることができるものなのであるが、このような可能性は、彼によれば、現実すでに近代文学そのものの中から発生していた。既に先に彼の手紙の中でも

述べられていたように、この近代文学に新しい時代の可能性を示している者こそゲーテに他ならない。「ゲーテの文学は真の芸術、純粋な美の曙光である。」(S.114)『ファウスト』が完成すればそれは『ハムレット』をも凌ぐものともなろう。「彼は興味的なものと美との、また技巧的なものと客観的なものとの中間に立っている。」(S.115)彼の諸作品はあるものは前者の側にあるものは後者の側に立っていると判断されるからである。しかし全体として「この偉大な芸術家は美的教養の全く新しい一段階への展望を切り開いた。彼の作品は客観的なものが可能であり、美への希望が決して理性の空虚な錯覚ではないことの証左である。客観的なものはここでは現実に既に達成されており、本能の必然的強制力があらゆるより強力な美的力を興味的なものの危機からそこへと導く管であるから、従って客観的なものはまもなくより一般的になり、また公的に認められ至る所で支配的になるであろう。」(S.116)こうして、さらに彼はゲーテの開いてくれた新しい時代への展望を行っている；やがて《客観的なもの》の支配が実現するならば、そこで一つの決定的な「道徳的革命」(Ebenda)をむかえることになる。そこでは自由が自然に優越し教養の発展及び美的力の方向も人間性という目的及び法則によって決定されるようになるであろう。また「芸術の自由と趣味の共同性」(S.174)を通じて芸術と教養が公的なものになり芸術の二元的分裂や芸術家と公衆との分裂といった現状も克服されるであろう。

以上のように近代文学の展望或は最終的課題を明らかにしたシュレーゲルは、次いでそこに至る道程を近代文学に対して説明していくことになる。そこで問題となるのは、悟性によって、従って主観性によって教導されてきた近代文学が、それと対立的な客観的な文学にいかにして

転換しうるかということであろう。彼によればそもそも「興味的なもの、性格的なもの、技巧的なものの支配」ということは美的文学における全くの美的他律」(S.121)なのであって、この他律が極まっているのが現状なのであった。そしてまたそうした《美的無政府状態》のなかでこの他律の状態を克服する展望についてもすでにゲーテにその萌芽が認められていた。従って美的自律をこの萌芽に依りつつ発展させていくにあたって「欠けているのはただ正しい方針と正しい輿論だけなのである。」(Ebenda)

それではこの「正しい方針と正しい輿論」は何によって獲得されうるのであろうか？彼はこの問いに対してはそれは理論によってであると答える。彼によればいまや《客観的なもの》の支配する時代を実現すべき「美的革命」(S.121)の時をむかえつつあるのだが、この美的革命に際してまず「完全な美的立法が最初の機関」(S.122f)となるのであってその美的立法を行うものこそ理論に他ならなかった。「というのは悟性こそが最初から近代人の教養の教導的原理だったのであるから。」(S.123)即ち悟性を指導的原理として教養を形成するヨーロッパの近代人においては、美的立法においてもまたこの悟性の力によって、従って理論によってこれを行う以外にはないのである。そして、実はここに於いて近代文学に於けるかの独得な「理論と実践の関係」、即ち科学の芸術に対する指導的地位もまた理解されうるのである。

ただし、彼によれば、科学(＝理論)が真に芸術を指導するためには、科学は一定の要件を満足しなければならない。即ち「科学が完全な歴史と結合した場合のみ芸術の本性及びその様態を知悉するに至るであろう。科学は、それゆえ、その様態に於いて全く完全な実例であり、特にその特殊な歴史が同時に芸術の一般自然史をなすような芸術の経験を必要とするのである。」(S.123)科学が法則を発見しその理論が実践的

指針となり得るためには「至高の美的典型」(Urbild)」(S.124)を必要とするのである。科学はこのような対象と結合してはじめて芸術に対する真に実践的な理論を提示しうるるのであるが、ここで要請された「美的典型」こそ実は古代文学(＝ギリシア文学)に他ならないのである。

そこで以下ではシュレーゲルの古代文学の意味及び具体的分析をみてみたい。

#### (四) 古代文学の本質

彼は美を定義して次のように言う；「美とは…一つの無私な満足の普遍妥当な対象であって、それは必要或いは法則の強制から独立しており、自由でありつつなおかつ必然的であり全く無目的でありながらなお無条件に合目的である。」(S.110)そして彼にとってはこのような美こそ真の芸術の目的なのであり、かかる美を追求する《美的芸術》こそ真に芸術の名に価するものなのであった<sup>20</sup>。この《美的芸術》は近代の《叙述的芸術》とはもちろん性格を異にするものである。なぜなら既に見たようにそれは美そのものを追求するものではなかったからである。他方彼によれば人間の全教養過程＝歴史過程は自然的教養と人為的教養との対立によって規定されているが、その場合近代文学はこの後者に基づいているのであってそこで追求されるものも決して美そのものではなかった。ところがこれに対して「ギリシア人に於いてのみ芸術は必要の強制と悟性の支配から常に自由であったし、ギリシアの教養の開始からその終焉に至るまで…ギリシア人にとって美的遊戯は聖なるものであった。この美的遊戯の聖なること及び叙述的芸術の自由とが真のギリシア性の本質的特質である。全てのバルバロイに於いては、これに対し、美はそれ自体では決して善くはなかったのである。」(S.125)即ち美そのものが、近代文学の場合とは違って、ギリシア文学の追求目標と

なっていた訳である。そしてこのようにして美はギリシアに於いて最も完全な展開を示すことになり、従って「ギリシアの文芸の歴史は文芸の一つの普遍的自然史であり、一つの完全な、かつ立法的観念でもある」(Ebenda)のである<sup>21)</sup>。ギリシア文学はかくして「一つの至高の美的典型」として近代文学の美的革命にとって必要な美的立法にその規範を与えてくれるものとなるのである。

次にそのようなものとしてのギリシア文学を具体的にシュレーゲルがどう見ていたかを整理しておきたい。彼は先にあげたその処女論文ではギリシア文学の諸流派についてこれをイオニア派、ドーリア派、アテネ派、アレクサンドリア派の四類型にまとめ、同時にこれらを四つの歴史的段階としても位置づけていたが<sup>22)</sup>、それに対して本論文では彼はこれを三段階に区別している。叙事詩の段階、抒情詩の段階、悲劇の段階がそれである。これらはそれぞれ1794年の段階でのイオニア派及びドーリア派、アテネ派に相当するものであって、結局アレクサンドリア派が省かれていることになる。多分これはアレクサンドリア派においては「芸術が芸術の目的となり美の代りに伎倆が目的」<sup>23)</sup>となっており、従って近代文学にとって「美的典型」たり得ないためであると思われる。

叙事詩の時代とは言うまでもなくホーマーの時代を指すのであるが、彼によればギリシア文学はこの「幼児期においてすでに偶然的なものではなく本質的なもの・必然的なものを叙述し、個別的なものではなく普遍的なものを追求するという高い任務を志していた。」(S.126)それはまたギリシアの神話にも源流をもつが、この神話においては神々が絶えず人間と様々な機会を通じて直接の交渉を持っており、その宗教における「尊崇の対象は真の神性すなわち真の人間性」(S.126)に他ならなかった。こうして神話

的源流そのものからも叙事詩は「真の人間性」或は「普遍的なもの」の叙述にむかう方向づけを受け取ることになったのである。従ってホーマーの英雄達はアキレウスやディオメデス等いづれもその完全性、均衡、自由な人間性、道徳的美しさ、美しい社交性等々によってまさに「真の人間性」の叙述を我々に与えてくれるのである。ただし、「ホーマーの詩に於いては道徳的力と道徳的充溢とが優越しており、道徳的統一性と道徳的持続性とはそれらが見出されるところでは決して心情の独立の作用ではなくしてただ教導的自然の一つの幸運な産物にすぎないのである。」(S.128)即ちホーマーの詩はそれがどんなに個別的な対象に沈潜しようとも「客観的なもの」「普遍的なもの」を叙述し、純粋な人間性を叙述するとはいえ、しかしながらそれはあくまで自己の教養の基礎をなす「自然」によって決定的に規定されているのであって、それはただこの「教導的自然の一つの幸運な産物」としての特殊な性格を持つのである。「この未熟な文芸は、まだ教化された詩の存在しない時代に、また、…神々の人間性や神々の英雄との交流とが一般的な民衆の信仰であるような時代においてのみ存在する」(S.159f)のであって、従ってこのような特殊な条件の存在しない近代にあっては決して新しいホーマーは出現しないであろうし、従ってまたこの段階のギリシア文学は「美的典型」としての条件を備えていないのである。

抒情詩の段階は上のような「自然」の決定的支配からの一定の解放が実現した段階である。「運命はギリシア人をして単に自然の息子がなりうる最高のものたらしめたのみではなく、それはまたギリシアの教養が独立して成年に達し外からの援助も教導も必要としなくなるや否やその母の後見を排除してくれたのである。この、自由が自然に対して優越を獲得するという決定的歩みとともに人は事物の全く新しい秩序に踏

み込むことになった。人は今や彼の天分を内的な彼の心情の法則に従って形成するようになる。芸術の美はもはや恵み深き自然の賜物ではなく彼の心情の独自の作品、その創造物となる。彼は独立的に彼の趣味を決定した叙述を秩序づける。彼はもはや単に与えられたものを所有するのではなく、自発的に美を創造するのである。…叙事詩的段階は他の諸民族文学にも対応するものを示すことができるが、しかし抒情詩の段階に踏み込んだのはギリシア文学のみであり、またそれのみが全体として独立性という教養段階に達し、そこに於いてのみ理念的美が公共のものになったのであった。」(S.131)このようにして教養の一定の独立と対応して「理念的美」がギリシアのポリス市民全体のものとして、近代におけるような個人的なものとしてではなく「公共のもの」として、芸術家個人のものとしてでなく公衆全体のものとして享受されるに至ったのである。

悲劇の段階は抒情詩の段階から開始された《自然》からの解放が頂点に達し、またギリシアの美的芸術が最高度に完成された時期でもある。「初期のギリシアの文芸は一部は神話的時代の叙事詩のようにそれ自身未だ未熟な教養の不完全な試みであったり、また一部は抒情詩の時代の様々な流派のように完全な美を分解していわば自分達の間で分配したところの限定的に限定された諸流派であった。ギリシアの文芸の中で最もすぐれているのはアッティカ悲劇である。以前の諸様式や時代、流派の中に個別的に存した完全性がこの悲劇を規定し、純化し、高め、統一し、かつ秩序だてて一つの新しい総体になし遂げているのである。」(S. 139)そのようなものとしてソフォクレスが「悲劇を完成しギリシア文学の最高目標を達成した。幸運にも彼はアテネの公的趣味の最高潮時にも遭遇した。…彼は完成した趣味と完全な形式の利点とを同時代人と分かちあった。…天才的力量に於

いては彼はアイスキュロスにもアリストファネスにも劣らないし完成と平穏さにかけては彼はホメロスにもピンダロスにも等しい。優美さにかけては彼は全ての先駆者にもまた後継者にも勝っている。」(S.139)このように悲劇の段階、とりわけソフォクレスに於いて「ギリシア文学は現実にこの芸術と趣味との自然的教養の最終的極限に、自由な美の至高の頂点に到達したのである。」(S.133)ここに於いてギリシア文学は「完成」(Ebenda)し「黄金期」(Ebenda)を迎えることになった。そこで実現したのは「至高の美」であって、「それ以上のものが考えられぬという意味での美ではなくして到達不可能な理念の完全な実例が即ち芸術と趣味との典型がここでは言わば目に見えるものとして存在しているのである。」(Ebenda)そしてこのようにここで実現されているのが相対的に高度な美ではなく絶対的な美であるがゆえにこそギリシア文学は近代文学に対しても「典型」として意味を持つのである。

こうして悲劇の段階においてギリシア文学は最高度の完成に到達するのであるが、ただしそこで注意されなければならない事はここで達成された「至高の美」は近代文学にとってはあくまで「典型」にすぎないということである。或るいは到達不可能なものだという事である。「というのは、至高の美が可能であるのは、ただ芸術と趣味とが均衡を保って発展し…完成をみるところ、即ち自然的教養においてのみである。人為的教養のもとではこの均衡は教導的悟性の恣意的な分離・混合によって再現不可能な形で失われている。…かの至高の美は一つの生成した、有機的に形成された総体なのであってそれは極小部分の分離によっても分解され、ほんの僅かの均衡の狂いによっても粉碎されてしまうものなのである。教導的悟性の人為的機構は教導的自然の芸術の黄金期が持つ合法則性は所有する

ことができるが、しかしその均衡は決して完全に再建することはできない。一度分解された基本諸要素が再組織されることは決してないのである。自然的教養の頂点は、従って、全時代にとって芸術的進歩の高い典型たり続けるのである。」(S.136f)

このように「典型」に学びそれを再度実現することは極めて困難なことである。しかしながら「希望がどんなに少なくとも企てることが必要なのである！」(S.111)その際、かの均衡は再現できぬにしても「合法則性は所有することができる」ということが肝要なのであって近代文学はそこに突破口を見出すことができるであろう。そしてその突破口を示しその前進のための道筋を解明すること、即ち近代文学に対して芸術の法則を提示することこそが科学＝理論または哲学の任務に他ならなかった。従って科学＝理論はまず何よりもこのギリシア文学を研究し、そこにおける特殊の要素を分離して法則的なもの・普遍的なものを抽出するよう努力せねばならないのである。

かくして近代文学はギリシア文学に立ちかえり「古代芸術の模倣」から再度新たな文学的活動を開始することを要請されることになった。シュレーゲルによれば、近代文学はこの場合の模倣に関しては決して従来のような一面的理解に基づいてそれを行わぬよう厳に慎まねばならない。従来の模倣が何も産み出さなかったからといっても「罪がギリシア人にあるのではなくて模倣の手法・方法にこそ罪があるのであって、国民的主観性が支配し人がただ興味的なもののみを追求しているかぎりその手法・方法は一面的たらざるを得ないのである。」(S.159)従ってまず何よりもギリシア文学を全面的にとらえ、「興味的な」態度を捨てて全体の客観的観察を通じて法則性、完全な形式等々をそこから導き出すべきなのである。そして彼はここでヘレニズム以来のギリシア文学に関する理論の

一面性を強く批判し、そしてその批判をアリストテレス自身にまで溯りつつ<sup>24)</sup>何よりもまず全体像を追求することを今後の課題として力をこめて提起している。客観的・法則的なものがギリシア文学から抽出されることは近代文学に於ける来たるべき変革にとって不可欠の要素なのである。

## (五) 美的革命

シュレーゲルは近代文学の本質、それに対立し、かつ「典型」として来たるべき近代文学の変革——美的革命——に大きな役割を果たすものとしての古代(＝ギリシア)文学の本質を明らかにした。そこでその上にたって来たるべき美的革命を展望して論文を終えている。

彼は、まず、近代文学をその中での主観的なものと客観的なものとの間の関係の変化を基準として三段階に時代区分する<sup>25)</sup>。

第一期は「一面的な国民的性格が美的教養全体の中で決定的な意味を持ち、ただあちこちでほんの僅かな個別的な美的概念の支配及び古代への傾斜との痕跡が現われるのみである」(S.171)ような時期である。明確な年代的規定は与えられていないがダンテ以降の時代を指していることは確かであって中世中期以前は除外されている<sup>26)</sup>。

第二期は「理論と古代の模倣とが全体のうち多くの部分を占めるが、しかしまだ主観的本性があまりに強力であって客観的法則に完全に従うことができなかった。…模倣と理論とは、そしてそれとともに趣味と芸術自身も一面的でありかつ国民的なものに止っていた。」(Ebenda)この段階は17世紀のフランス古典主義を中心とする文学的状况を指していると思われる。

そしてこのような時代に続く「全ゆる個人的手法の、全ゆる主観的理論のそして様々な古代の模倣の無政府状態と、さらに一面的国民性の消失・根絶とは第二期から第三期への過渡的危

機である。」(S.171f)

近代文学はこれら「二つの教養の段階をすでに後にし、そして現在はその第三期の開始期に立っている。」(S.172)この「第三期においては、少なくとも全体のうちの個別的部分においては客観的なものが、即ち客観的論理、客観的模倣、客観的芸術、客観的趣味が達成されている。」(Ebenda)この第三期こそ、ゲーテによって開始された近代文学の新しい段階に他ならない。

シュレーゲルは、以上のように近代文学を三期に区分しつつさらに次のように付言する。

「第二期は全体のうちの一部分に於いてのみ、第三期の開始は全体のうちの個別的諸点においてのみ見られるのであって大部分は今だに第一の段階に止まっており今だに全文芸の目的は興味的・国民的生活の忠実な叙述に他ならない。」(S.172)即ち全体としてみればヨーロッパの近代文学は全般的なカオスの状態にあるのである。

このような全般的な《無政府状態》のなかでシュレーゲルが注目し、期待を寄せるのはドイツである。そこにはなるほど否定的側面も存在している。ドイツの近代文学はイタリアやフランス、イギリス等々と比較して国民性に乏しく、その結果文学のあらゆる要素を取り込んでいる。ドイツは「全時代全世界の全ての国民的性格の殆んど完全な地理学的博物標本室の観があり、ドイツ的なもののみが欠けているといえる」(S.91)位であって「美的小売店」(S.91)を通じてドイツ人はあらゆる文学を入手し得る。しかも「政治的不手際」(S.174)によってドイツでは人間の自由が束縛されており教養の普遍化が妨げられ、かくて芸術家と公衆の結合や天才の出現といったことが妨げられている。しかしこうした否定的諸条件にも拘わらずドイツで新たな近代文学の発展への胎動が開始されたこともまた重大な事実である。ゲーテの文学がそれである。否文学の場においてのみではない。文

学に対して指導的立場に立つべき理論の側面では「フィヒテによって批判哲学の基礎が発見されて以来、カントの実践哲学の綱要を補正し補完・完成するための確実な原理が存在する。そして実践的・理論的な美学の一つの客観的体系の可能性についてはもはや根拠ある疑問といったものは存在し得ないのである。」(S.173)さらに「ギリシア研究一般、特にギリシア文学の研究においても…重大な段階への境界に立っている。」(Ebenda)ギリシア文学の研究は近代文学の変革に必須の要件だが、ここでも今や「全体を客観的原理に従って秩序づける」(Ebenda)というギリシア研究の過程での最終段階にさしかかっているのである。

こうして「ドイツにおいて、そしてドイツに於いてのみ美学とギリシア研究とが完全な文芸と趣味の変革を必然的に生起せしめずにおかぬ高みに達した。」(S.176)近代文学は、ドイツを先陣として大きな変革期にさしかかっている。

「美的教養の重要な革命に対して時は満ちている。現在はただ推測することができることを、人は未来においては明瞭に知ることであろう。…恐らく今後の時代は熱狂的崇拜をもってしてではないにしても、しかし今日の時代に対する満足なしには回顧はなし得ないであろう。」(S.172)

彼のこの予言は一部は外れ一部は当たった。即ち彼がやがてロマン主義を主張した時、そこでは《古代の模倣》ということや《客観的なもの》の支配という内容は取り下げられていたからであり、しかしそれにも拘わらずその時代は今日に至るまで、「満足」をもってか否かについては別として、「回顧」され続けているからである。

## (六) 歴史意識

シュレーゲルが「古代文学」研究の意義について論ずるという形式をとりつつ、その過程に

において深く古代と近代との本質的差位の探求を行ったという点については以上で十分であろう。ここではこうした過程で示された彼の歴史意識の意味について考察しておきたい。

[ das Wesentlich - Moderne ]  
· die künstliche Bildung  
    (Verstand, Begriff)  
· die darstellende Kunst  
    ( das philosophisch Interessante  
    das Manierirte  
    die philosophische Tragödie  
· der Zwiespalt des Geschmacks

これらの諸概念は、特に近代のそれについてはさらに様々な言い替えがなされているので収録しきれないが、この時期(1795年まで)のシュレーゲルに於いてはこのうちの「本質的に古代的なもの」の側に重点があり、そしてそこに重点を置きつつこれらの「本質的に古代的なもの」と「本質的に近代的なもの」の結合という「美的革命」が目指されていたということが言えるであろう。

こうした対立概念の根源については、一つは彼の個人的資質があげられよう。すでに指摘したように彼はその青年時代を通じて悟性の過剰と実行力の皆無という不調和に苦悩し、或は自己のうちの悟性と自然との不調和に苦悩した経験をもっていた。しかしこのような「自然的統一の喪失感情」や「自己分裂」という現象は、他方彼一人のみの特性であるとはいえないであろう。むしろこの苦悩は宗教改革やデカルトの二元論以来ヨーロッパ近代人が背負った宿命的な問題であったと言えると考えられる。従ってこの二元的分裂・対立を示す対概念は当時の人々にはある程度共通するものであったと見ることができる。事実シラーも時を同じくしてほぼ類似の対概念を形成していたのである<sup>27)</sup>。

このようにこうした対概念そのものは決して彼に特殊なものではないとすればそれでは彼に於ける独自のものは何か——それは彼の歴史意識であると私は考える。彼の独自の点は、それがいかに時代的通念と結びついていたものであったにせよその諸概念を歴史的に展開した点

彼は古代と近代とを対比させつつ論考を進めたが、その中で様々な対概念が提出されている。今ここで一応まとめると凡そ次のようになるであろう。

[ das Wesentlich - Antike ]  
— die natürliche Bildung  
    (Natur, Trieb)  
— die schöne kunst  
    ( das Schöne  
    das Objektive  
    die schöne Tragödie  
— die Gemeinschaft des Geschmacks

にある。後年には激しい対立関係に立ったシュレーゲルとシラーとの分岐点も、一つはここにあったと考える。即ちシラーの場合には「素朴文学」及び「情感文学」という超歴史的範疇を歴史の中から抽出し、両者の同等の存在理由を示すということに重点が置かれたと考えられるのに対し、シュレーゲルの場合はむしろ諸概念を具体的歴史的過程そのものの中で展開し、位置づけているからである。そこでは彼は古代の文学を一つの自然史として、一つの有機的統一体としてまず把える。そしてそこに於ける《美》の発展を歴史的に跡付ける。美的芸術の完成期はこうしてまた古代民主政完成期に対応して把えられることになる。近代を彼が一つの有機的統一体とは見ていないことは事実である。有機的統一体はもはや近代的教養では回復できず、ただ目的にむかっての「永遠の接近」(S.111)以外にないといっているからである。しかしこの近代についても彼はまず悟性の支配という点で古代と質的に区別し、それが統一体としてのヨーロッパの具体的な歴史過程とどう結合して当時の無政府状態に行きついたかを段階づけ、そしてそれに対して、例えばドイツでは「政治的束手際」という歴史的状況が対応させられている。或るいは趣味が分裂し芸術家と公衆との間に分裂がおこり、芸術家が「時代と民衆のまったただ中で孤立したエゴイストとして」(S.102)してしか存在し得ない時代と対応して語られる。従って来たるべき《美的革命》も、また、もはや単なる近代の延長ではないのであろう。それ

自体は近代文学が古代文学という《美的典型》を模倣するという内容を持つとはいえ、決して悟性を放棄もしなければ美の追求を放棄もしない以上そでの革命は両特質の《総合》という形をとらざるを得ず、従って一言で言えば近代と古代の総合たらざるを得ないのであろう。そしてそれについてはまた新たな時代、社会が対応せしめられる。なぜなら彼は同時に道徳的革命についてもそこで語っているからである。

このように彼は自己の概念を歴史過程と結合させて組織立てていくという彼独自の意識を通じて大規模な、ヘーゲルの《弁証法》を思わせる歴史哲学に近づいている<sup>28</sup>。

もっとも彼自身それ以上思想を展開してはいないし、この論文の主題は決して歴史哲学的なものではなかった。ただここで最後につけ加えておきたいのは彼のこの意識が当時のドイツについて持っていた意味についてである。それについては例えばガタラー（1727～1791）を一例としてあげたい。彼は「ゲッティンゲン大学において1760年代から70年代にかけてシュレーツァーとともに最も有名な歴史家であった」<sup>29</sup>人であるが、彼は「旧約聖書と新約聖書が人類史の段階づけに対して現実的構造を提供するという信念」<sup>30</sup>を持ち、その世界史の構想として次のような図表を示している<sup>31</sup>。

<社会組織>	<非キリスト教徒>	<キリスト教徒>	<知識形態>
国民も王国も存在せず	I 天地創造（世界紀元1年）	アダムの墮落(1) 諸技術(900-1000) 大洪水(1656)	神話と啓示の時代
八大支配諸国民又は八大征服体制	II 諸国民の形成(1809) アッシリア人(1874) ペルシア人(3425) ローマ人(3838-3939) バルティア人(3808-3845) ペルシア人(A.D.226)	偶像崇拜 分散  キリスト生誕(3983)	書物による伝達と古典的歴史の時代
同盟体制又は征服体制	III 民族大移動(5世紀) ゲルマン人とスラヴ人(5世紀) アラブ人(622) モンゴル人とタタール人(1209-1369)  IV アメリカ発見(1492)	教皇(6世紀) 十字軍(1069-1291) 印刷術(1440) コンスタンチノーブル陥落(1453) 学問の再生  宗教改革(1517) トリエント宗教会議(1545-1563) 勢力均衡(16世紀) ウエストファリア条約(1648) 新哲学(16-17世紀)	年代記と手写本の時代     収集家、批評家、美学者、プラグマティストの時代

ここではさすが四世界帝国論が影を潜めているが、しかし天地創造を世界紀元1年として以後の人類史を叙述しようとする構想はまさに中世的構造を基本的に踏襲したものであるといえるだろう。Ⅲの民族大移動以後の叙述に関しては

中世的な大枠の中での合理化とでも言えばよいであろうか。  
次のもう一例はヴァックラーの1793年に出た『文学史試論』の目次である<sup>33</sup>。

第I巻第1章天地創造よりノアまで。

第2章ノアよりモーゼまで  
第II巻第1章モーゼよりアレクサンドロス  
まで

第2章アレクサンドロスよりキリス  
トまで

シュレーゲルがこの論文を書いた1795年という時点は文学においてはゲーテ、シラーの親交が成立し「古典主義文学」が開始されて間もない時点であり、哲学ではカントが三大批判を完成し(1790)フィテが『全知識学の基礎』を発表した翌年にあたっている。このように当時のドイツは知的な高揚期を迎えていた。しかしながら他方、歴史学の分野では必ずしも同様に事態が進んでいたとはいえぬ状況であったということは先の例でも考えられることであろう。「この世紀半ば頃には1720年以前に生を受けた歴史家のなかにまだ歴史はキリストの言葉の真実を証明するということを示したがる傾向があった」<sup>34)</sup>のであって、宗教と歴史学はドイツに於いて特に強く結合していたのであった<sup>35)</sup>。

そしてこのような状況をふまえて再度シュレーゲルの歴史意識をふりかえるならば、質的区別の上に立って時代を区分し、それぞれの時代に特殊な内的原理を追求し、さらにその内的原理の様々な展開過程を相互連関的に認識するという彼の根本的態度のなかに<sup>36)</sup>、この時点に於いてすでに、啓蒙主義的進歩史観を克服するにあたって大きな役割を果たす理論——発展段階論——の萌芽が芽生えてきていると認めることができるように思われる。ここに「この時点」というのは「彼の出発点」の謂であり同時にまた「ドイツのこの時点」の謂でもある。そしてこのような出発点を彼に与えたものこそ彼に独自の歴史感覚でありそして歴史意識に他ならなかったのである。

勿論これはまだ「出発点」であり「萌芽」にすぎない。これをいかに育てていくかは《美的革命》を目指す今後の彼の歩みにかかっている

のであって、それについては今後の研究課題としたい。

註

- ① フリードリヒ・シュレーゲルが自己をロマン主義者として明確に意識したそれを公表したのは1798年、雑誌『アテネウム』(Fragmente, Nr. 116)においてであった。しかしそこに至る歩みはすでに1796年に開始されていたとするのが今日の定説的理解といえよう。Haymのようにそれをゲーテの影響によるとする場合(Haym, R., *Die romantische Schule* 3. Aufl. (1920) S.286ff)にしるLovejoyのようにシラーの影響によるとする(Lovejoy, A. O., *Essays in the History of Ideas*(1960)p.203.)場合にしろ同様である。従ってここで彼の活動の「最初期」という場合は、1794年に彼が公的活動を開始してから1795年までの、即ちロマン主義者への決定的歩みを開始する以前の時代を指すのである。
- ② Herder, *Über die neuere Deutsche Literatur* (1767) in, Herders Werke, hrsg. v. Hans Lambel 3-1 S.152f.
- ③ Haym. a. a. O. S. 196.  
なお、彼が学んだゲッティンゲン大学は当時のドイツ古代学の中心地であり、彼がその教えをうけたハイネは、またゲーテやフンボルト兄弟等にも大きな影響を与えている。(ゲーテ『詩と真実』第3部第12章参照)
- ④ Schlegel, Fr., *Von den Schulen der Griechen Poesie* (1794).
- ⑤ Schiller, Fr., *Xenien*  
「フランス狂の冷静な熱狂が去るや否や、ギリシア狂の激烈な熱狂が始まる。」  
これはフリードリヒ・シュレーゲルのギリシア崇拜を皮肉ったものである。  
(Haym, a. a. O. S. 238)
- ⑥ Schlegel, Fr., *Über die Studium der Griechischen Poesie* (1797).
- ⑦ この期の彼の論文集には以下のものがある。  
*Friedrich Schlegel 1794-1802. Seine Prosaischen Jugendschriften*, hrsg. v. Jakob Minor. Bd I: Zur griechischen Literaturgeschichte, Wien(1882); Bd II: Zur deutschen Literatur und Philosophie,

Wien (1882)。(以下Minorと略記)

なお、以下では註⑥の論文からの引用は単に頁数のみを記すが、それはMinor(I)の頁数である。

上記の他に彼の著作集が現在刊行されつつある。

*Kritische Friedrich-Schlegel-Aufgabe*, hrsg. v. Ernst Behler unter Mitwirkung von Jean-Jacques Anstett und Hans Eichner. München/Paderborn/Wien: Schönningh (seit 1962 zugleich Zürich: Thomas) 1958 ff. (以下K. A.と略記)

⑧ Hüge, E., *Poesie und Reflexion in der Ästhetik des frühen Friedrich Schlegel* (1971) S.11.

⑨ Haym, a. a. O. S. 197f

⑩ 「近代」という用語がシュレーゲルにおいてどこにその開始の時点を持つものとされているかについては、ダンテについての叙述の中で「ダンテの偉大な作品は……最古の近代文学の技巧的性格に関する一つの新たな証文書である」(S.98)とあり、ほぼダンテ以降の時代を指すものといえよう。それ以上の説明は本論文ではなされていない。なお、ここで一言付言すれば、この論文の中にはじめてromantischという用語が出現するのであるが、彼はこの論文の中ではこの用語に後の時代のように特定の意味をまだこめてはいない。それはむしろ中世～近代全体を指す「普通の歴史的形容詞」(Love joy, *op. cit.* p.193)として使用されているにすぎず、その意味でmodernよりは長い射程を持つ歴史的形容詞として意識されていたと言える。

⑪ 「とりわけ目立って対照的なのは、ギリシア文学全体の持つ単純な同質性と近代文学の持つ多様性及び異種なものの混合ということである。」(S.143)

⑫ この二種の教養は、「神性と獣性の統一体である」(S.96)という人間性の本性に基づいているものとされている。

⑬ 「分析的悟性の傾向は一定の目的にむかうものである。」従ってこのような悟性により教導される文学は「一つの単独の概念と意図によって規定される」ことになる。(S.98)

⑭ 「近代文学の美的教養の人為性を明らかにし、また確証するものとしては近代文学における個性的なもの、性格的なもの、哲学的なもの、大きな優位性以上のものはない。」(S.103)

⑮ 「美的芸術に特殊な性格は一定の目的を持たぬ

自由な遊戯であり、叙述的芸術のそれは一般に叙述の理念性である。」(S.103)

⑯ 「その目的が哲学的に興味的であるような理念的文学を私は教訓的文学(die didaktische Poesie)と名付ける。」(S.105) この教訓的文学は「性格的文学」(Ebenda)から「哲学的文学」(S.106)へと発展し「哲学的文学の自然の発展・進歩は性格的文学を哲学的悲劇へと導く。」(Ebenda)

⑰ 「彼は自己の本質の理想像をハムレットのうちにみた。」(Huch, R., *Die Romantik. Blütezeit, Ausbreitung und Verfall*. Tübingen, Rainer Wunderlich Verlag Hermann Lains, (O. J.), (Einmalige Sonderausgabe Band 112 in der Reihe "Die Bücher der Neunzehn"), S.21. 北通文訳『独逸浪漫派』, 岩波書店, 昭和8年, 19頁。

こうした「悟性の過剰」と皆無の「行動力」の間のシュレーゲルに於ける「不調和」については彼自身後年『ルチンデ』に叙述することになるが、それはまた全ての研究者も一致して強調するところでもある。例えば、Haym, a. a. O. S.188. Endels, K., *Friedrich Schlegel*, Leipzig(1913)S. 28. Behler, E., *Friedrich Schlegel* (1966) S.14 等参照。

⑱ 別のところではまた次のようにも言っている。彼は「全ての芸術家の中で近代文学の精神をそもそも最も完全にそして最も卓抜に性格づけた人である。彼に於いてロマン的幻想の最も魅力的な花とゴシックの英雄時代の巨大な偉大さが近代の社交性の最も勝れた特徴及び最も深くまた豊富な文学的哲学と結合している。」(S.107)

⑲ 彼はここでシェイクスピアのManierが歴史上最も偉大であり、彼の個性は最も「興味的なもの」を示していると指摘して彼を最大のマニエリストと位置づけている。この場合彼は、「Manierという概念のもとで私が理解しているのは、芸術において理念的であるべき叙述の中に現われるところの、精神の一つの個性的傾向と感性の一つの個性的情調とである。」(S.109)と定義しており、これは今日的なマニエリスムの概念と(Hausser, A., *Sozialgeschichte der Kunst und Literatur* (1969) S.377-387. 高橋義孝訳『芸術と文学の社会史』平凡社(1970) 2. 423~434 頁参照)共通している。ここから正當にも、ホッケは「フリードリヒ・

シュレーゲルは……—ゲーテと並んで— 巫流の  
マニエリートハイト  
衝奇性をはげしく弾効しつつははじめて<高度の意  
味におけるマニエリスム>を認識しかつ承認したの  
であった。(傍点筆者)と位置づけている。  
(ホッケ, G. 著種村季弘訳『文学におけるマニエ  
リスム』現代思潮社(1977)第1巻211頁)

⑳ Hüge, a. a. O. S. 51参照

㉑ また; 「ギリシア文学においては芸術の有機的発展の全過程が含まれ、かつ完成されている。そして美の可能性が最も自由かつ完全に表現されることのできた芸術の最高潮期の時点は趣味の完成段階をも含んでいる。…それは趣味と芸術の一つの永遠の自然史である。」(S.146)

㉒ 「ギリシア文学の発展は以下のようなものであったといえよう。それは自然から出発し(イオニア派)、教養(ドーリア派)を通じて美に達した(アテネ派)。」アテネ派は「崇高」(アイスキュロス)から「完成」(ソフォクレス)へと発展してここで頂点に達して後は「奢侈」(エウリピデス, アリストファネス)へ、次いで「優雅」(新喜劇)へと没落した。このようにして「美がもはや存在しなくなって後、芸術は技巧品となり(アレクサンドリア派)ついにバルバロイの中に自己を没することになったのである。」(Minor(I) S.10)  
シュレーゲルがギリシア文学の一つの「自然史」として把えるという場合はこのようなその生成・展開没落の「有機的発展の全過程」を念頭に置いていたであろう。

㉓ Minor, (I)S.9

㉔ アリストテレスに対する強い批判は以後もずっと彼は持ち続けていく。(Haym, a. a. O. S. 220)

Klassische Kunst	——	moderne Kunst
Natürliche Dichtung	——	künstliche Bildung
Vorstellenden Vermögen	——	strebendes Vermögen
System des Kreislaufes	——	System der unendlichen Fortschreitung

(Lovejoy, *op. cit.* p.215)

なお、この論文をシュレーゲルが読んだのは彼自身の論文を完成し出版社に発送した一ヶ月後のことであった。(Behler, K. A. (II)S.XII)従ってシュレーゲルはシラーとは別個にほぼ同様な概念構成を形成していたことになる。

㉕ Hüge, a. a. O. S. 54

㉖ Reill, P. H., *The German Enlightenment*

㉕ 「近代文学の教養史が示しているのは主観的資質と美的能力の客観的傾向との間の不断の闘争であり、また後者の前者に対する漸次的優越ということに他ならない。主観的なものと客観的なものとの関係の本質的変化ごとに新しい教養の段階がはじまる。」(S.171)

㉖ 註10参照。

中世については本論文では「古典古代と近代の教養の中間の時期を占める大きな野蛮な間奏曲」(S.99)として否定的にしか位置づけていない。この点1796年以降のシュレーゲルと相異している。彼がこの中世と近代との強い連続性を意識し、中世=近代を一つの時代としてこれを古代に對置するようになるのはヘルダーについての評論が契機の一つとなった。(Die Rezension von Herders *Humantätsbriefen*(1796)、in K. A. (II)S.47-55)彼はこの評論の中で中世=近代全体の統一性の中核をなすものとしてキリスト教に注目し中世開始以来のヨーロッパに「絶対的完全性・無限」への努力を認めている。(K. A. (II)S.49)このように中世=近代を全体として一つのものととらえ、これと古代を對立せしめる考え方はやがて彼の後のロマン主義の段階で明確になるものであって、それに至る歩みの出発点がこのように認められる。従ってこの意味からも(中世に対する軽視とならんで)1795年までの段階のシュレーゲルを啓蒙主義の徒としてとらえることができるであろう。(Hüge, a. a. O. S.27参照)

㉗ Schiller, F., *Über naive und sentimentarische Dichtung* (1795)

この論について次のような対概念をLovejoyが指摘している。

*and the Rise of Historicism*(1975). p.228

㉘ *ibid.* p.78.

㉙ *ibid.* p.80.

㉚ 彼の啓蒙主義的な「合理化」の別の例として、例えば人間の寿命に関する彼の説があげられよう。彼によると天地創造以来の人類の寿命に関しては次の6つの段階があるという。

第一段階	1	:	900~969 歳	:	大洪水 (A. M. 1656) まで
第二段階	2/3	:	600 歳	:	大洪水直後
第三段階	1/2	:	450 歳	:	アルバクサデ等
第四段階	1/4	:	239 歳	:	バベルの塔建設
第五段階	1/8	:	120 歳	:	モーゼ時代 (A. M 2493)
第六段階	1/12	:	70~80 歳	:	ダビデ時代 (A.M 2696) 以降

このように人間の寿命が次第に短縮してきたのは、アダムの子孫以後地球が不完全さを増大させ現在のような不完全さになるまでに一定の時間を要したからだという。つまり最初の時期ほど完全性に近く、従って空気もきれいで健康的であり地球もより豊かで肥沃であり果物や野菜もより大きく栄養も豊富であったからである。そこから地球上の人口は大洪水以前がそれ以後のどの時代より大きかったとも推定する。(ibid. p. 78f)

③③ Ludwig Wachler, *Versuch einer allgemeinen Geschichte der Literatur*, (1793) (Behler, K. A. M, S. XXXII f から採ったものだがここには他の例もあげてヴァツクラの著作は当時としては特殊なものではなかったことが示されている。

③④ Reill, *op. cit* p. 41

③⑤ カントが『世界公民的見地に於ける一般史考』

(*Idee zu einer allgemeinen Geschichte in Weltbürgerlicher Absicht*, (1784)) で歴史学に対し人間の進歩を叙述するよう要求したのもこのような状況に対して哲学の側から発言する必要を彼が当時よく感じたからなのであろう。

③⑥ 「科学的な人間の歴史学の諸時代は適当な外的誘因やそこから結果する注意すべき外的変革によってではなくて、内的発展の必然的な諸段階によって区分しなければならぬのである。」(Schlegel, F., (Über) *Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit human.* (1795) K. A. (VI) S. 5 傍点筆者)

この評言はコンドルセの時代区分を批判しているのであって、彼はここでは進歩史観を受容しつつも、その進歩の内的・質的發展を重視する立場からこう言っているのである。